

三つの願いの考察

この童話からは、「**発言に対して責任を取れ**」という教訓が読み取れます。

妖精の願いを聞いてあげたら、木こりは3つの願いを叶えてくれました。

しかし、その願いは3つとも、くだらないことに使ってしまった。

これは、うっかり余計なことを口にしてしまったからですが、発言に対して責任を取らされた形になります。

ちゃんと考えてから願いを口に出せば、3つもあったのですから、お金持ちになることも可能でした。

ところが、変なことを口にしてしまったがために、それは水の泡と消えました。

現代社会でも、ちょっとした発言が不利益を招くことは多いですね。

例えば、会社の責任者が変なことを言ったがために、その会社の売上げが大きく下がってしまったり。

ところが変な発言の尻拭いをさせられるのは、現場の従業員だったりします。

売上げが下がったことによりボーナスがカットされたり、リストラになったり。

そして、肝心の不用意な発言をした責任者は、ダメージを受けない。

この童話では、**余計なことを口にした本人が、その尻拭いをする**ことになりましたが、**本来あるべき姿はこの童話です。**

それからかみさんは、木こりの鼻にソーセージがくっついて、取れないのを見て、

「それほどみっともなくもないわ。」

というセリフがありました。

このセリフからは、**完全に人ごとだ**、というかみさんの心理がうかがえます。

そして、この時点で2つの願いを使ってしまったので、もう一つの願いはお金持ちになりたい、などに使いたく、

「このソーセージを鼻から取る」ということに願いを使いたくないという気持ちがうかがえます。

やっぱりお

金がからむと、人の本性が出るということが読み取れます。

木（き）こりは、願（ねが）い事（ごと）をするなら今（いま）だ
と思（おも）い、このソーセージが鼻（はな）から取（と）れ
ますように と願（ねが）いました。

すると、ソーセージはポロリと テーブルの皿（さら）の上
（うえ）に落（お）ちました。

木（き）こり夫婦（ふうふ）は黄金（おうごん）の馬車（ばしゃ）
には乗（の）れなかったし、絹（きぬ）やサテンの服（ふく）は
着（き）られませんでした。

しかし、これ以上（いじょう）ないほどうまい黒（くろ）ソー
セージを食（た）べることができました。

「何（なん）なのよ、これは？」

すると　木（き）こりは、今日（きよう）あつたことを、初（はじ）めから終（お）わりまで、女房（にようぼう）に話（はな）して聞（き）かせました。

ところが、かみさんはだんだん渋（しぶい）い顔（かお）になり、
こうガミガミ言（い）いました。

「あんたって人（ひと）はバカだね、ジャン、大（おお）バカだよ。いつそソーセージが鼻（はな）にくっついてしまえばいいんだよ。」

そのとたん、ソーセージがぶら下（さ）がったおかげで、木（き）こりの鼻（はな）は うんと長（なが）くなってしまいました。

木(き)こりが引つ張(ひっぱ)っても、かみさんが引つ張(ひっぱ)っても、くつついて離(はな)れません。二人(ふたり)で力(ちから)を合(あ)わせ、鼻(はな)がもぎとれそうになるくらい引つ張(ひっぱ)りましたが、どうしても取(と)れません。

「どうしたらいいだろう？」

「それほどみつともなくもないわ。」

かみさんは、木(き)こりを見(み)ながらそう言(い)いました。

はこの幸運（こううん）に ぼうつとしてしまい、 家（いえ）に着（つ）いた時（とき）には ただ休（やす）みたく思（おも）いました。

ひよっとしたら、あれは妖精（ようせい）のいたずらだったかもしれない。本当（ほんとう）のところはわからないなあと思（おも）っていました。

木（き）こりは 暖炉（だんろ）の火（ひ）の前（まえ）に座（す）わっている、だんだんお腹（なか）が空（す）いてきました。

「おい お前（まえ）、 タ（ゆ）うご飯（はん）に食（く）うものはなにかあるか？」 おかみさんに聞（き）くと、「ありませんよ。 晩（ばん）ご飯（はん）まで二時間（にじかん）にじかんもあるんだから。」

「なんだ、 まったく、 今（いま）ここに黒（くろ）ソーセージのつながったやつがあればなあ。」

木（き）こりがそう言（い）い終（お）わらないうちに、 カタカタ、ガサガサ、これ以上（いじょう）なく上等（じょうとう）なひとつながりの 黒（くろ）ソーセージが上（う）えから落ちてきました。

木（き）こりもびっくりしましたが、 かみさんは三倍（さんば

三つの願い

原作 イギリス民話
アレンジ・要約 物語の最後に案内
読み聞かせ 花城 亜衣



むかし昔(むかし)の 大昔(おおむかし)、 貧(まず)しいき
こりが住(す)んでいて、 毎日(まいにち)森(もり)に、木(き)
を切(き)りに 出(で)かけていました。

ある日(ひ)のこと、大きな樫(かし)の古木(こぼく)を切(き)
る予定(よてい)で、 それを切(き)ればいい厚板(あついた)
がたくさん 取(と)れるはずでした。

さて 木(き)こりは、 斧(おの)を振(ふ)り上(あ)げると、
目(め)の前(まえ)に妖精(ようせい)が出(で)てきて、「お
願(ねが)いですから この木(き)は切(き)らないでください」
と、 両手(りょうて)を合(あ)わせて しきりに頼(たの)

んできました。木(き)こりは 当然(とうぜん)びっくりしまし
たが、 やつとのこととで、「そうかね、それじゃあお前(まえ)
さんの言(い)う通(とお)りでしょう。」と言(い)いました。

妖精(ようせい)は、「それは本当(ほんとう)によいことをし
てくださいました。 感謝(かんしゃ)のしるしに、どんなこと
でも、これから願(ねが)いを三つ(みつ)、 叶(かな)ええて
差(さ)し上(あ)げましょう。」と 言(い)って、 いきなり消
(き)えてしまいました。

挿絵 小川浩

<https://www.anatanowebisait.co.jp>

しかし 帰(かえ)り道(みち)は遠(と)く、木(き)こり